
アフターストーリー

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフターストーリー

【Nコード】

N5146BA

【作者名】

うな

【あらすじ】

全てが終わって、それでも俺たちは旅を続ける。

(前書き)

前日譚はないです。安心してお読みください。

その後の話を少しだけしよう。

そう。ラインの復讐が終わり、俺たちの物語が幕を引いた後の話だ。

帝都大虐殺を命からがら逃れた俺とラインは暫く辺境の村に見を隠した後に、機械都市を目指して足を進めていた。理由は言うまでもなく、先の戦闘で負った傷を癒すためだった。

俺は右目、ラインは左脚。お互いに治癒魔法を掛け合ったお陰か、患部が腐り落ちるなどということとはなかったが、旅を続ける以上は健康体でいることは最低限の条件だ。宿願を遂げたとはいえ異種族の間の子である俺たちに安住の地などない。一時的にとどまるならまだしも、永住することなど不可能なのだ。

旅は続ける。続けねばならない。となると身体に負った傷は……特に脚の欠損は捨ておけぬ重大な問題であった。

適当に見繕ったオーク樹の杖を突きながらひよこひよこ俺の後ろをついてくるライン。まだ一刻と歩いていないというのに、その額には玉の汗が浮かんでいた。

できれば日の低いうちに距離を稼ぎたかったのだが、致し方あるまい。

「そろそろ休憩しよう。もう少し行くと泉がある」

「ほあ……疲れたあ。おんぶしてよアベル」

「荷物を全て持った上に更に貴様を背負えと？」

「そうそう。“所有物”って意味じゃ違くないわけだし」

「主人におぶさる奴隷など聞いたことがないが……」

「『だがそれも致し方あるまい』、でしょ？」

「癪だか、そういうことだ。ほら、早く乗れ」

「わーい、だからアベル好きい」

などと喚きながら俺の背に飛び乗る。慣れたもので、開いた手で杖を掲げ馬か何かに言うように指示を飛ばしている。

かつては俺の方から提案しても決して手を取ることは無かったのだが、復讐を遂げてからは随分と態度が軟化したように思う。これが生来のリインの性格なのだろう。竜は決して人には懐かないが、その因子を七割ほど受け継いだ少女はその限りではないようだ。

「ねーねー、アベル」

泉へと続く獣道、背中から声が聴こえる。無事な左目で泥濘や蔦などに足を取られぬように注意しながら返す「どうした？ 脚が痛むか」。

「それはぜんぜん。流石はエルフの魔法だよあ」

「褒めても何も出んぞ。脚でないなら、なんなのだ」

「んとね……そう、性急な話しじゃないというか……あんまり好んで聞きたいことじゃないけど、落ち着いてるうちに言わなきゃダメかなあ……って」

珍しく齒切れが悪い。普段は無駄な口上など置かずに結論や感情を真っ先に話するのがこの娘のスタイルだけに、違和感を覚える。

「……………」

「どうした、黙っていても何も分からないぞ」

「うん……その、ね。リイン、母様との戦いで……脚、なくなっちゃったから」

「ふむ。それで」

「アベルも、リインも帰る場所なんかどこにもないから。だから、旅をしなくちゃいけない。でも、リインは脚が悪いからアベルに迷惑をかけるし……奴隷なのに、何もできないし……」

「その話についてはもう決着がついたろう。治癒魔法は己には効かない。俺もこの目を諦めたわけじゃないからな、定期的に貴様に魔法をかけてもらう必要がある。貴様は充分俺のために働いている。そも所有物風情が己の益について思索するなど烏滸がましいと思わ

んか、リインよ」

「アベル……」

そうこうしているうちに泉のほとりまで到着した。

さほど大きな泉でもないが、周囲は清浄な気に満ち薄く茂った草のそこらに靈気の結晶化したものが落ちている。色はディープブルー、水の靈気が凝り固まったそれは一般に『水靈の涙』（ティアーズ）と呼ばれている。市場価格はさほど高くはないが、塵も積もればなんとやら。俺の背中で十分に休憩したのか、疲れたと泣き言を言っていたリインはもうティアーズを熱心に集めている。根無し草である以上、このような小金集めも重要な仕事の一つだ。

「前に来た時よりいっぱいあるよー！」

「ほう……純度も悪くないな。よし、あと二山ほど集めてこい。煮詰めて魔石にする」

「うん、分かった！」

ひよこひよこ駆けていく。天候を司る水竜の系譜であるためか、水辺にいるといつも以上にテンションが高いリイン。砂風よけのマントを脱いでいるので、服を不自然膨らませるコブのようなものが背中にあるのが遠目にも見て取れた。

「翼……か」

角も逆鱗もないリインが母親から受け継いだ目に見える繋がり。

小さく、空を飛ぶことは叶わないが放出魔法を扱う際の増幅器として働く、黒竜の翼。今まで幾度と無く救われてきた頼もしい竜の象徴。

リインがその気になれば……この水靈の気に溢れた場所であればどれだけのことができるだろう。こと“破壊”という視点から見れば不可能なことなどほとんどないのではなからうか。彼女が翼を軽く震わせるだけで俺は消し飛ぶ。

「は……馬鹿な」

リインはそんなことはしない。絶対に。分かってはいても身が震える。「可能であるということ」はそれだけで無言の圧力とな

る。その圧力が俺たちを純血の連中から遠ざけてきたのは紛れも無い事実だ。

「……ふう」

大きく息を吸い、吐いた。そして呟く【浄火】と。

大地を焼き浄め魔石を生成するための陣を描く。蛇のように走る火が大地を焼き焦がし円陣の周囲に力のある文字を刻んでいく。

人間であれば工房を設け、然るべき触媒を用いねば決して成功せぬ法もエルフとの混血である俺にかかれれば兎戯にも等しい。だからこそ俺たちは厄災の種であり、どこにもいられないのだ。

「集めてきたよー！」

半刻ほどしてリインが戻ってきた。脱いだマントを即席の袋代わりに使ったらしい。東方の異国に「ふるしき」という布があったが、それに似た使い方だ。

「よし、これだけあれば充分だろう。陣の上へ固めてくれ」

「ん、りよーかーい」

ざらざら音を立てながらティアーズが盛られていく。これだけあればそのまま売りに出してもそれなりの額になるだろうが、携帯が面倒だ。魔石に煮詰めてしまった方が遥かに高価だし、大きさも拳程度になる。

「少し眩しいぞ。目を瞑っている」

リインが離れたのを確認してから地に手をつき、魔力を送り込んだ。ティアーズの霊気を凝縮し魔気になるまで純度を高めるだけの作業だが、霊気と魔気の両方に敏感であるエルフの血が流れていないと高品質の魔石は作れない……らしい。一度リインにもやらせたことがあるが、凝縮しすぎてただの魔気の塊になっていた。魔石はそこに封じられた魔気を術者が取り出し魔力として運用することが最低限できなければならぬ。また、可能な限り魔気が分散しないように適度に固める必要がある。要は、凝縮が多すぎても少なすぎ

てもダメなのだが、竜種は自身が巨大な魔力タンクのため上手く調整できないのだ。

「あはっ、アベル上手上手ー！」

出来上がった魔石を手にとってはやぐリン。元となったティーズの純度が総じて高かったからか、確かにかなり出来の良い水魔石に仕上がっていた。我ながら良い仕事をした。これなら向こう三ヶ月は安泰

「すごくきれいだねー。母様の宝物庫にもこんななかつたよ？」
愛おしそうにリンが魔石を眺めている。

「竜種には無縁のものだからな。魔石はあくまで使い捨ての魔力タンクであって宝石じゃない。時間がすぎれば色あせ、霧散する」

「うん……でも、でもね？ ずっときれいじゃないから、逆にきれいなんじゃないかな。リンはいっぱい見てきたよ、そういうの」
「なんだ、花の話か？」

「んと……花もそうだけど、他にもたくさん。人間とか、エルフとか、いっぱいいっぱい見てきたよ。頑張って、戦って、少しずつ弱ってみんな最後にはいなくなる。リンのパパとママもそうだったけど、それは悲しいけど醜くはないよ。ううん、きれいなんだよ。すごく、すごく……」

魔石を眺める目がふと遠くなる。

……そうか。この子は半分以上が竜の因子でできている。それはつまり、他種族とは比べ物にならないほど寿命が長いということだ。どれだけ幼く見えても俺よりも遥かに長い時を生きている。そしてこれからも生きていく。

もしかすると竜が金銀財宝を貯蔵する習性があるのは、それらが変わらないからなのだろうか。何もかもが移ろっていく中で変わらず自分と共にあるものを傍に置きたくて……略奪し己の物にする。それ以外に何も無いから。

「リン」

魔石を握る手を、その上からそっと握った。

「ん？ どうしたの、アベル」

無垢な目が俺を見た。彼女はずっとこの目で見てきたのだろうか。自分を置き去りにして過ぎ去るもの全てを、ただ見送ってきたのだろうか。ただ「きれい」だと思いながら、花を愛でるように。

「俺は、まだ死なない」

「ふえっ、急になんの話!？」

「いいから黙って聞け。俺はまだ死なない。エルフも長寿種だからな、あと百年やそこらは問題なく生き続ける」

「うん……?」

「だがリインは五百年は生き続けるだろう。あるいは千年を超えるかもしれない。その間、リインは旅をし続ける。俺が死んでも、ずっとだ」

「……うん」

リインの顔が明らかに曇った。もしかしたら、俺の背中で妙な質問を投げかけた時もこんな顔をしていたのかもしれない。下を向いて、目を瞑って、唇を震わせて。

不意に、本当に何の前触れもなく強烈な感情が生まれた。この娘を独りにしてはならないという義務感が俺の中を駆け巡り、驚くほど自然に浸透した。

「独りは嫌か？」

「……うん」

「見送るのは辛いのか？」

「……うん」

「そうか。それじゃ……」

これから伝える提案を、どう婉曲的に言ったものかと思考を巡らせる。ストレート過ぎると勢いで殺されかねないから充分に練ってから口に出さねばなるまい。

「まずは、そうだな……」

この水魔石をリインに送ってから言葉の続きを考えるとしようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146ba/>

アフターストーリー

2012年1月14日09時48分発行